

# 都市公園における子どもの遊びの実態

— 熊本市の4つの都市公園の事例調査より —

中迫由実・村上夏奈子\*

## An Exploration of the Play Habits of Young Children in Urban Parks - A Case Study of four Urban Parks in Kumamoto City -

Yumi Nakasako, Kanako Murakami

(Received October 1, 2013)

The aim of this report was to gain an understanding of the variety of play activities that occur in urban parks in Kumamoto City, with a specific focus on play types and behaviors among young children. The study indicated that for young children to have a variety of play experiences, a varied selection of play elements should be present in parks, and these elements should be located close together so that young children can move between them easily. Availability of playground equipment and spaces for children of different age groups led to the development of more complex play in young children.

**Key words :** Urban Parks, Young Children, Play habits

### 1. はじめに

2017年に都市公園法が改正された。都市公園は全国的に一定程度整備されてきたが、公園をどう活かすかがより重要になってきている。施設の老朽化に伴い「遊び場」としての魅力の低下が顕著となってきた公園の活性化についても、自治体の整備費や維持費には限界があるため、民間と連携などを含め新たな都市公園の整備手法の創設など、さまざまな事例が展開されてきている。

子どもからみると都市公園は、禁止事項を多く設けられていることや犯罪の危険があることなどから敬遠されることもあるが、都市部を中心に、園外保育の主要な訪問場所として、特に幼児にとってなくてはならない場所となっている。新型コロナウイルス感染症の拡大期においては、「密」を避けて過ごせる場所として、幼児のみならず大人にとっても精神衛生上必要不可欠な場所として機能していた。

幼稚園教育要領解説では、遊びを通した周囲の環境との関わりが、心身の調和のとれた発達の基礎になるとしている。

公園で遊ぶ意義は、「遊び場での遊びを通して自然との関わり合いや天候や季節変化の実感といった多様

な直接体験を得ることができる」と都市公園における遊具の安全確保に関する指針ではうたっている。荻須<sup>1)</sup>らによると幼児期からの公園等の利用により大学生になってからの体力差、運動習慣、食生活習慣、心身のバランス等に影響することが明らかとなっている。幼児期の遊びを通した多様な体験がその後の成長・発達に繋がるとの視点から、本報告では、多様な遊びができる公園の空間構成について分析することを目的として、身近な公園で幼児の遊びがどのような場所で発生しているのか実態調査を行った。

既往研究では、平塚ら<sup>2)</sup>は「公園の空間構成、遊具構成には多様性が求められるが、面積等の問題から周辺公園の空間や遊具構成が類似しないといった個性を備えることも必要である」と指摘している。仙田<sup>3)</sup>の「こどもの遊び環境」の著書では、「異なる機能を持つ遊具がまとめて配置されている場合には、幼児が自ら進んで遊具間を移動して遊ぶ」としており、その他にも都市公園での遊びの構造に関して、多くの知見が得られている。

本報告では、上記の知見を踏まえつつ、熊本市内の都市公園を調査対象として、コロナ禍の下での幼児が遊ぶ場所や遊びの種類、その動作の調査を行った。多様な遊びがどのような場所で発生しているかを調査し、多様な遊びが体験できる公園の空間構成について

\* 元熊本大学教育学部

分析, 検討を実施した。

多様な遊びとは、遊びの種類が複数であること、同じ遊びの種類の中でも遊びの動作が複数あること、例えば砂遊びであれば、砂を触る、砂を固める、山を作るなどの状況、つまり、異なる遊びの動作が時間をあけることなく連続して発生する様子を指すものとする。

2. 調査方法

熊本市東区の4つの公園を選定し、2020年10月～11月の間に幼児の遊びの様子を観察調査した。調査を行う公園については、遊具数やその種類、樹木の本数、面積等の空間構成に共通している部分、異なる部分等があり、公園の空間構成について相互に比較考察ができる公園を選定した。観察対象者が幼児であるかどうかは、運動能力や会話等から目視で確認した。

2.1 調査対象の概要

秋津東公園は、出入り口が南側、西側にある。東側には神社が隣接しているため、神社の駐車場や連絡通路からも出入りできるようになっている(表1)。遊

表1 調査対象概要

	秋津東公園	桜木公園	水玉公園	水前寺江津湖公園(広木地区)
広さ(m <sup>2</sup> )	3230	3205	4079	1265000
区分	街区公園	街区公園	街区公園	広域公園
立地	熊本市東区桜木	熊本市東区桜木	熊本市東区秋津新町	熊本市東区広木町
アクセス	「沼山津神社前」バス停すぐ	「桜木小学校西」バス停徒歩5分	「秋津新町」バス停徒歩5分	「南町」バス停徒歩10分(無料駐車場有)
開設時期	昭和48年	昭和47年	昭和37年	昭和41年
遊具	鉄棒	鉄棒	鉄棒	
	滑り台	滑り台	滑り台(アスレチック遊具)	
	ブランコ	ブランコ	ブランコ	
	シーソー	シーソー	スプリング	
砂場	あり	あり	あり	なし
休憩施設	なし	屋根付きあり	屋根付きあり	なし
木(本数)	13	26	40	4

表2 各公園の利用状況

	秋津東	桜木	水玉	江津湖
幼児	7	12	41	25(うち園児18)
子ども(小学生以上/人)	0	3	7	2
大人	6	11	33	8(うち保育士4)
遊びの発生数(個)	87	125	301	104
1人当たりの遊びの発生数	12.4	8.33	6.27	3.85

具はシーソーと砂場と鉄棒、滑り台とブランコがそれぞれ隣接して配置されている。ベンチは全部で4つ配

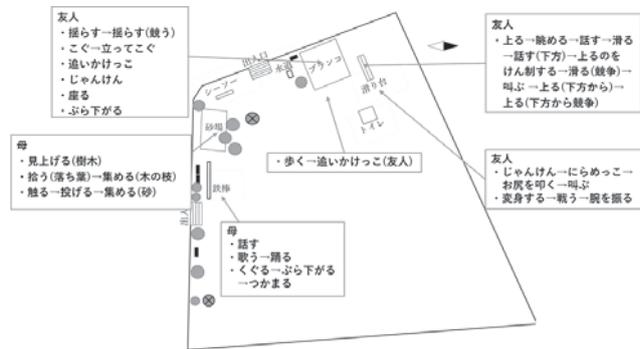


図1 秋津東公園での遊びの出現

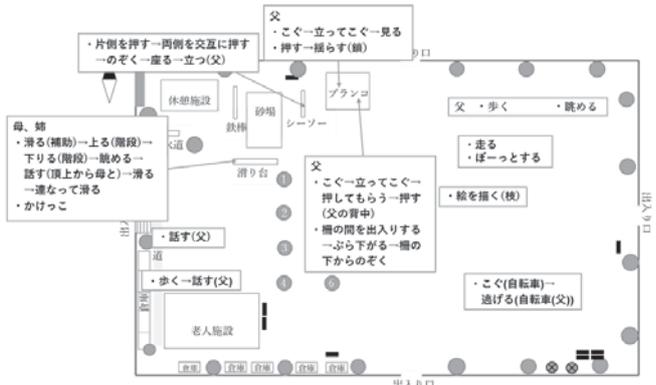


図2 桜木公園での遊びの出現

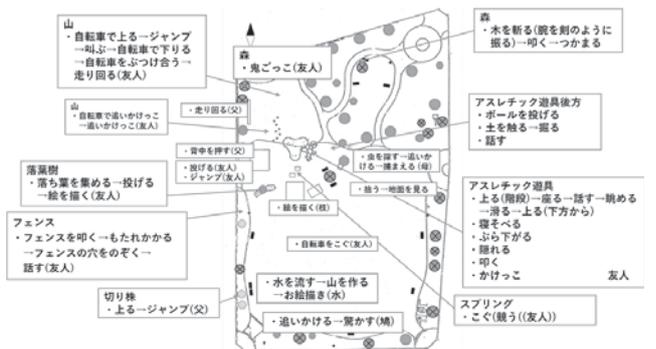


図3 水玉公園での遊びの出現

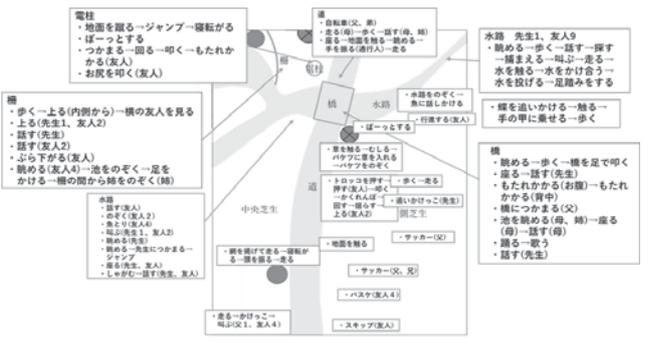


図4 江津湖公園での遊びの出現



3.2 大分類の内訳

大分類の内訳は、どの公園も人的環境内での遊びが60%を超えていた(図6)。物理的環境内での遊びは、どの公園も「冒険・探索遊び」が最も多く、江津湖公園は特に多く発生している。また、水玉公園の生物遊びが多い。発生した遊びの小分類の数にも公園によって違いがみられた。

人的環境内での遊びは、物理的環境内での遊びほど違いは見られなかったが、桜木公園は固定遊具を用いた乗物遊びが、水玉公園では「身体動作遊び」が多いなど、公園ごとに特徴があった。

3.3 連続した遊びの内訳と場所

幼児の遊びには、「滑り台を滑る→下方から上る」のように、異なる動作が時間をあけずに続けて発生する(このような状況を「遊びが連続している」と記す)場合とそうでない場合がみられたが、遊びが連続している場合の方が、幼児が遊具等の1つの場所に興味をもって熱心に遊ぶ姿が見られた。

どの公園も遊びの総発生数のうち連続した遊びはおよそ75%であった(図7)。しかし、遊びが多く連続した場所は公園によって異なっていた(表3)。秋津東公園では滑り台での遊びが多く連続しているが、他の公園では砂場や山といった遊具以外の場所が多く連続している。また、遊具のない江津湖公園では水路、中央芝生、で連続した遊びが多くみられた。このことから、遊具のある公園で遊具と遊具以外(砂場、グラウンド、通路等)の場所での遊びの連続率を比較すると、桜木公園では「遊具」での遊びの連続率が66.6%「遊具以外」が54.3%と逆転するものの、遊具以外の場所の方が連続率がやや高かった。

3.4 遊具における遊びの発生と遊びの動作

遊具のある公園では、遊具の大きさや形といった規格の違いによって発生する遊びの種類や動作に違いが発生していると考えられる。秋津東、桜木、水玉の各公園の滑り台で発生した遊びについて記す。

滑り台の概要は表4に示す。滑り台の高さが高くと、踊り場で叫んだり眺める遊びが発生していた。また、踊り場の面積が広いと真下の空間で隠れるといったアジト遊びが発生していた。一方で、水玉公園は遊具の高さが他の2つの公園よりも低く、踊り場の面積も狭いが、アスレチック遊具の周りをまわりながら隠れる遊びが発生していた。アスレチック遊具の形状が多量の死角を作っているからだと考えられる。また、水玉公園では他の公園では発生していない「感覚遊び」や「体操技遊び」も発生しており、様々な遊具が複合されたアスレチック遊具では多くの遊びが発生していることが確認できた。

また、滑走部分の数でも違いが確認できた。それぞ

れの滑り台の滑走部分で発生した遊びは表4に示した。

滑走部分が2つ横に並ぶ秋津東公園と水玉公園では競いながら遊んでいた。桜木公園では姉や友人と連なって滑る、頂上から滑ることと下方から上ることを



図7 各公園の場所別連続した遊びの発生率

表3 各公園の場所別連続した遊びの発生率

公園名	場所	連続した遊びの発生率 (%)	N
秋津東	グラウンド	71.4	14
	鉄棒	71.4	7
	滑り台	86.7	15
桜木	滑り台	75	36
	ブランコ	84.4	32
	砂場	85.7	14
水玉	アスレチック遊具	85	40
	ブランコ	83.3	24
	築山	96.2	26
江津湖	橋	85.7	14
	中央芝生	100	7
	水路/東側	100	11

表4 各公園の連続した遊びの発生率

	秋津東	桜木	水玉
滑り台の高さ (cm)	210	165	100
踊り場の大きさ (cm)	118 × 58	60 × 91	97 × 50
階段の段数	10	7	6
階段1段の高さ (cm)	21	23	20
滑走部分の長さ (cm)	402	383	175
滑走部分の横幅 (cm)	43	44	50
滑走部分の数	2	1	2
発生した遊び	踊り場: 音楽遊び・叫ぶ・おしゃべり・眺める	踊り場: おしゃべり・眺める・叫ぶ	踊り場: おしゃべり・眺める
	滑り台: 滑る・休憩	滑り台: 滑る	滑り台: 滑る 階段: 体操技遊び、模倣遊び
	滑り台周辺: ゲーム遊び・走る・アジト遊び・土遊び	滑り台周辺: 叫ぶ・走る・散策・休憩	滑り台周辺: 走る・アジト遊び・休憩遊び・土遊び・感覚遊び・機能遊び

同時にしてぶつかるなどの遊びが発生していた。滑走部分が2つあると幼児は競争心を誘発されていたが、桜木公園で見られた連なって滑る、上下からぶつかるなどの遊びは確認できなかった。また、滑走部分での遊びを1人で遊んでいる場合と比較すると、友人と遊んでいる場合の方が遊びの動作が多く連続していた。

### 3.5 遊具の有無による遊びの動作の違い

遊具がない江津湖公園では、橋や電柱等において、遊具と似た遊びの動作をする幼児の姿がいくつか観察された。

柵ではブランコの柵や鉄棒と構成が見ていることから、「ぶら下がる」遊びが同様に発生している。

さらに、電柱では「回る→叩く→もたれかかる」と遊びが連続している。回る遊びは電柱につかまって眩暈の感覚を楽しんでいるようであった。他にも電柱においては、ぼーっとする、寝転がるなどの「休憩」や「跳ぶ遊び」、「蹴る遊び」が発生していた。いずれも幼児が電柱に興味をもって多様な遊びを行っていた。

このことから、遊具がなくても、身近なものを遊具に見立て、遊びが発生していることが確認できた。しかし、遊具のない公園では滑り台の下方から上る、ブランコをこぐといった、より複雑な身体動作を伴う「乗物遊び（固定遊具）」は見られなかった。遊具では複雑な身体動作を伴う遊びが期待できる。

### 3.6 遊び相手と遊びの種類

公園によって一緒に遊びに来ている相手として保護者や兄弟が多い公園と、友人が多い公園があった。どの公園でも、一人で遊ぶ場合は「感覚遊び」や「散策」等の比較的静かな遊びが多いが、遊び相手がいる場合は「おしゃべり」等の伝達遊びや「走る」、「跳ぶ」等の身体動作が多くみられた。また、保護者と遊びに来ている幼児が多かった桜木公園を除くと、友人と遊ぶ場合が最も多くの遊びが発生しており、「競技遊び」や「鬼遊び」等の規則がある遊びも見られた。

### 3.7 他の子どもの影響による遊びの発生

観察調査において、幼児の遊びの発生には公園に遊びに来ている他の子どもの影響もみられた。桜木公園では、隣の幼児をじっと見たり、同じ場所に移動したりする姿や、シーソーで遊ぶ小学生を見た後、同じように遊ぶ姿も見られた。水玉公園のアスレチック遊具では、パネルに上って話している小学生2人組に混ざって遊ぼうとする姿が見られた。幼児にとって、異年齢の子どもたちが遊ぶ姿が刺激となり自分の遊びに影響するため、多くの年齢の子どもたちに向けた遊具や空間があることが幼児の遊びを多様にすると考えられる。

### 3.8 動植物と遊び

江津湖公園の水路では、魚を眺める動作から、捕ま

える、驚かすというように動作が変化していた。始めは魚に向かって叫んでいたが、そのうち叫ぶこと自体を楽しむように変わっていた。また、水玉公園の落葉樹の下では落ち葉を一か所に集め、大量の落ち葉を使ってお絵描きをしたり、動植物は、幼児の自由な発想による遊びを生み出していた。

樹の配置には、桜木公園を例に挙げると、公園の周りを囲う樹木配置と、公園内部に点在する樹木配置がある。

公園全体を囲うように配置された樹木では、どの公園でも遊びが発生していなかったが、公園の内部に点在する樹木ではどの公園でも遊びが発生しており、樹の配置の違いで遊びが誘発されることが確認できた。

### 3.9 グランドにおける遊びの発生

4つの公園のグラウンドの面積とグラウンドで発生した遊びの種類や遊びの動作の数については、直接的な関係は見られなかった。地面の状況に着目すると、木の枝や土などの要素が遊びの発生数に影響しており、特に公園の砂や土は造形遊びを発生させていた。グラウンドにおいて、遊具や樹木の他に切り株などの植物や土や芝生等が遊びの要素になっていることが確認できた。

桜木公園には老人施設が敷地内にあるが、施設の裏を利用してかくれんぼをしたり、歩く姿が観察された。この施設の周りには倉庫が並んでおり、人が通れるようになっていた。倉庫や施設といった遊びの要素が点在していることで多くの死角が発生していた。

### 3.10 ベンチの配置

観察調査ではベンチ自体が遊びの要素にはなっていないが、ベンチの配置によって周辺で遊びが発生する様子は確認できた。4つの公園の中で唯一グラウンド全体にベンチが配置されている水玉公園では、1人で砂遊びやボール遊び等をする幼児を、一緒に来た大人はベンチからその姿を見守っていた。ベンチに座る大人は、幼児が遊具や出入口付近等、見守りが難しい場所へ移動したとき以外はベンチで幼児の遊びを見守っていた。

幼児のそばで大人が何気なく見守ることができるベンチは、幼児が安心して遊びを行うためには必要不可欠である。桜木公園のベンチは、グラウンドの南側に4つまとめて配置されていたり、公園全体を見渡しづらい老人施設の横に配置されており、見守りをしづらい配置となっていた。

## 4. まとめ

本研究では、幼児が遊ぶ場所や遊びの種類、その動作に着目し、身近な公園で幼児の多様な遊びがどのよ

うな場所で発生しているかを調査し、得られた結果をもとに遊びの分類を行い、多様な遊びが体験できる公園の空間構成について考察した。

#### 4.1 遊具の有無と発生する遊びについて

遊具の有無と発生する遊びの違いでは、遊具のある公園では「乗物遊び（固定遊具）」に加えて身体動作も発生していたが、遊具のない公園では身体動作のみであった。遊具のある公園では、単純なものから複雑なものまでより多くの身体動作を伴う遊びができていた。連続する遊びの発生場所は3つの公園それぞれで異なっていた。公園によっては、遊具より築山や砂場の方が遊具より発生していた。滑り台は3つの公園にあったがその形状や高さ、踊り場の大きさは異なり、踊り場の面積が広いとアジト遊びなども発生し、アスレチック遊具では多くの遊びの発生が確認できた。

先行研究において、より多くの動作が揃う遊具を設置している保育施設の方が幼児の「かがむ」「のぼる」等の動作能力が高い傾向が見られた<sup>4)</sup>ことから、身近な公園において、幼児期に単純な動作のものから遊具を介した複雑な動作を伴う遊びまでができることが望ましい。

#### 4.2 動植物との遊びについて

動物との関りでは、鳩がいる公園でほとんどの幼児が鳩と関わる動作を行っていた。別の公園では、水路に生息している小さな魚を介した動作が連続しており、生物との関わりから言語遊びもみられた。

植物との関わりでは、落ち葉や木の枝等を「拾う」「踏む」等の遊びが全ての公園で発生していた。落葉樹があると季節の変化に気づくという直接体験が可能になる。また、どの公園でも樹木を叩く「感覚遊び」や、樹木を利用してかくれんぼをする、樹木下でお絵描き等の遊びが見られたことから、樹木は幼児の遊びを多様にしていた。動植物を介した遊びは、幼児の自由な発想による遊びを生み出し、幼児の豊かな感性を育むことに繋がると思われる。

#### 4.3 幼児の遊びの多様性と公園の空間構成について

幼児期の遊びでは、1つ1つの遊びの種類や遊びの動作が「運動」「言語」「感性」等の様々な発達と繋がっているため、遊びをより多様にするのが重要であると考えられる。そのため、公園内に、幼児が多様な体験ができるよう遊びの要素を存在させることに加え、幼児が移動ししやすい距離に点在させることが多様な遊びにつながる。また、幼児にとっては異年齢の子どもが遊ぶ姿が刺激となるため、多くの年齢の子どもが遊べる

遊具や空間があることも重要である。加えて、同一校区内にある公園でも空間構成は異なり、幼児が体験できる遊びも異なっていたことから、複数の公園をできる限り利用するようにする等の工夫も必要と考える。

今後、幼児を公園に連れてくる保護者等に公園を選んだ理由や公園での過ごし方に対する意見の聞き取り調査を行うことで、保護者の視点から都市公園の活性化に向けた課題を見出していきたい。

#### 【引用・参考文献】

- 1) 荻須隆雄, 近藤洋子, 高島二郎, 仁藤喜久子, 福田誠 (2018): 子どもの発育・発達に及ぼす公園の利用に関する研究 一般社団法人日本公園施設業協会 共同研究
- 2) 平塚寛之, 引原有輝 (2015): 街区公園の現状分析ならびに子どもの利用状況と興味関心 日本発育発達学会 発育発達研究第 67 号 pp.1-15
- 3) 仙田満 (2009): 子どもの遊び環境 筑紫書房
- 4) 木下勇, 寺田光成, 地本真菜 (2019): 幼児の遊戯動作に関する基礎的研究—1963年と比較して— 千葉大学大学院園芸学研究所 地域計画学研究室 報告書
- 5) 幼稚園教育要領解説 (平成 30 年改訂) 文部科学省 フレーベル館
- 6) 柴谷久雄 (1970): 遊びの教育的意義: 黎明書房
- 7) 「都市公園における遊具の安全確保に関する指針 (改訂第二版)」平成 26 年 6 月 国土交通省
- 8) 尾谷悠介, 嶽山洋志, 山本聡, 薬師寺恒治, 中瀬勲 (2020): 都市公園における新型コロナウイルス感染症の流行が公園利用に及ぼす影響 日本都市計画学会関西支部研究発表会講演概要集第 18 号 pp.1-4
- 9) 木谷忍, 木村美智子, 今野浩次 (2011): 子どもの遊びの多様性の喪失について—福島県相馬市での遊びの現状と保護者たちの認識 農業経済研究報告第 42 号 pp.55-61
- 10) 長山宗美, 吉田鉄也 (1989): 児童公園の一部改変による利用行動の変化に関する研究 京都大学農学部 演習林報告第 61 号 pp.261-275
- 11) 小泉裕子, 川口和英, 田爪宏二, 長谷川岳男, 柴村抄織, 大石美佳 (2003): 〈遊び場空間〉の現状分析とこれからの公園デザイン: 地域の人々と共生するユニバーサルデザインの提案 鎌倉女子大学紀要第 10 号 pp.11-20
- 12) 「都市公園法改正のポイント」国土交通省都市局 公園緑地・景観課 <https://www.mlit.go.jp/common/001248733.pdf> (最終閲覧 2022 年 9 月 13 日)